第9回 絵双六に魅せられて

大正大震災雙六

1924（大正13）年

一九二三（大正一二）年九月一日午前一一時五八分に起こった関東大震災に因んで、防災の日が制定されました。マグニチュードは7・9、死者・行方不明者は一〇万五〇〇〇人に達しました。

翌年には早くもこの写実的かつ教訓的双六が発行されています。上がりの左下にあるコマは、現在の墨田区横網町にあった陸軍の被服廠跡地です。避難者が集中したところに巨大な火災旋風が発生し、犠牲者の数は四万余名におよびました。右下には皇居のお濠で髪を洗う避難民のコマもあります。

竹久夢二は、震災直後の被災地を取材し、スケッチと文を都新聞に連載しました。記事には「上野の秋色桜の枝にドドけてあった尋ね人のポスターは、小学生らしい筆跡で、信子さんココデマツ　オイデ　新次郎」と書いてあったのは涙を誘ふ」とあります。お母さんではわからないので、名前を書いたのでしょうか。SNSで安否確認ができるのは、一〇〇年後のこと。新次郎少年の悲痛な気持ちが伝わります。

この双六が作られた年、孫文が大アジア主義講演を行い、甲子園球場が完成し、米国では排日移民法が成立。ハップルが系外銀河発見の論文を発表しました。

ゆり出しと上がり
振出しとならぬ「ゆり出し」の時刻を時計が示しています。
上がりは生命・安全・財産。作者の魂の叫びが込められています。

日本赤十字の救護活動
震災救護も含めて大正時代の日本赤十字はすばらしい活躍をしています。第一次世界大戦での救護、ポーランド孤児救済、ロシア避難民救済。人道・博愛の精神は今日にも受け継がれています。

ナマズとネズミの袋絵
昔から地震の兆候として「ナマズが暴れ、ネズミが逃げ出す」といわれています。地震に伴う地中の電気的な変化にナマズは非常に敏感であるとの研究があります。

案：月の屋
サイズ：縦70cm×横91cm
絵を描いた山村耕花は「大正の写楽」と呼ばれた役者絵の名手であり、日本画や水墨画など幅広いジャンルで活躍しました。
所蔵＝吉田 修　写真＝白石ちえこ

文・監修 吉田 修
よしだ・おさむ●1954年生まれ。島根県松江市出身。全国老人情報協会常務理事、NPOキャリア権推進ネットワーク広報部長、和文化教育学会会員を務めるかたわら、築地双六館館長として双六の蒐集・研究・制作に取り組む。
公式HP＝http://www.sugoroku.net

＊1　軍人に支給する軍服類を作り、整備しておく軍の役所。
＊2　孫文が神戸高等女学校にて行った講演。日本の近代化を賞賛しつつ、その行き過ぎに警鐘を鳴らしたとされている。

2018

9
SEPTEMBER

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17 敬老の日	18	19	20	21	22
23 秋分の日 / 30	24 振替休日	25	26	27	28	29